

優秀賞

必ずしもそうではない現実

佼成学園女子高等学校 2年

徳久 聖奈

(平等な教育が必ずしも善でなかったら?) 帰りの飛行機で私は不安と焦り、それと興奮も混ざったような気持ちにかられていた。

今年の夏、私は「教育」という研究テーマを持ってタイで約二週間フィールドワーク調査を行った。七年前まで香港の地元の学校に通っていた私は、日本と香港の二種類の教育を受けたことになる。この経験から世界の教育、特に「教育格差」という分野に興味を持った。

やはり国際問題として欠かせない教育の課題だが、世界を変えるための十七の目標 SDGs では四番目に掲げられている。「だれもが平等に質の高い教育を受けられる」ためには具体的にどうしたらいいのだろう。なぜ教育格差が生じ、どう解決できるのだろう。最初に思い浮かんだありふれた疑問の数々は、ネットで調べれば、専門的に書かれた論文から小学生向けに易しく書かれたものまで百とでてきてあっけなく答えを知ってしまった気分だった。それから実際に自分ができることは何か、自分に身近な問題だからこそますます調べてみたくなり、タイでは国内での教育格差について都市部と山岳部の学校で調査することにした。

まず都市部にある私立の女子校を訪れた。医者になる夢、イラストレーターになって日本で活躍する夢、大学院にすすむ夢。様々な夢を持った生徒と交流したこの時間が、これから訪れるスラム街や山岳部に住んでいる子どもたちに会うのを少し怖くさせた。嬉しそうに日本語を披露してくれたり、先生を面白おかしく真似て笑い合うところは日本の生徒と変わらないその子達は、やはり SDGs の掲げる、いわゆる「質の高い教育」を受けていた。そうでない子どもたちは、自分たちの漠然とした未来にどのような夢を持つのか、自分には全く予想ができなかった。不公平だ。教育を平等に受ける権利があること、その実現を目指す思いが一層強まった。

だからこそ衝撃的だった。

「教育は必ずしも善ではない。」翌日訪れた少数民族が住むカレンの村の村人クイさんが語ったこの言葉をすぐに飲み込むことはできず、ただ鳥肌がたった。

カレンの村に住んでいる子どもは政府が建てた小さな小学校に通い、村からのアクセスが悪いため、多くは中高には通学せず親の仕事を継承するらしかった。村での調査は将来の夢を聞くこともなく終わってしまった。将来のために質の高い教育を「必要としない」村人達にとって幸せとは一日で自分がやる仕事を自由に決め、家族とご飯を食べ、時折受け入れるスタディーツアーの人達に自分達の文化を教えてあげたり、喜ぶ顔をみることだそう。

この時初めて課題の意味を取り違えていた自分に気づいた。教育の機会を与えることで村の仕事を担う村人が減ると独自の文化を失ってしまうこともあるかもしれないとクイさんは話した。だから教育は必ずしも善ではないのだと。そしてそう語ってくれたクイさんも大学には通っていなかったが、とても生き生きとしていた。

山岳部と都市部の教育格差はそもそも比較できる問題ではなかったのか、正直自分にはまだ分か

らない。しかし、価値観も文化も異なる人の言葉に大きな衝撃と影響を受け、日本でただ生活して
いては気づくことのなかった真新しい視点を発見することができた。いま、あふれるほどの情報が
与えられていて、教育も受け、研究もできる恵まれた環境にいる私だからこそ気づけることを発信
し、将来はこのような国際問題に対し様々な意見を出し合って支援できる国連機関に就きたい。こ
の言葉を受け、一年かけて準備した研究テーマをゼロから考え直すことになっても、今回覚えた興
奮に似た焦りを忘れずに、まだ自分が知らない課題の真相、支援を受ける側の想いを共有したい。